

# 会員の ひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

## シジュウカラの教え

旭川医科大学医師会  
旭川医科大学地域共生医育統合センター  
まきの ゆういち  
牧野 雄一

今年の3月初旬、娘に唆されて拙宅の庭に野鳥用の巣箱を設置した。旭川の郊外とはいえ、住宅街で果たして営巣するのであろうか？ 案ずるまでもなく、設置翌日から、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、ハシブトガラなどの野鳥が「物件内見」に訪れるようになり、2週間後にはシジュウカラが居住権を勝ち取った。4月初旬から巣作りを始め4月23日に1つ目の卵を産んだ。ちなみに、いわゆる「見守りカメラ」なるものを巣箱の内外に設置して、インターネット経由の映像を常時スマホで確認できるようにした。カメラの撮影範囲に動くものがあれば自動的に12秒間の録画を開始クラウド上に残してくれる。内蔵マイクで音声拾い、こちらからも音声を出すことができる。こんなカメラが2,600円で購入できるなんて素晴らしい時代だ。

その後、シジュウカラは通説通りに1日1つずつ産卵を続け、5月初めまでに計10個の卵を産んだ。これまた通説通り、10個目を産んだ直後から雌が抱卵を始めた。朝から晩まで、寝ても覚めても抱卵というのは大変な仕事であろう。当然のごとく自分で餌を獲りに行くこともままならない。そこで真価を発揮するのが雄らしい。雄は日に何度も雌の元に餌を運ぶ。芋虫や蜘蛛などが主食のようだが、雄からもらった餌をおそらく感謝しながらモシャモシャ食べていた。5月15日深夜、最初の雛が孵化し、翌未明までに9羽が孵化した。さて、ここから、雄はずばらしいパフォーマンスを見せる。通説によると、雛への給餌は雛1羽あたり概ね1時間に1回程度で日の出から日の入りまでの約14時間続ける。今回は9羽なので、1日あたり14回×9羽=126回。孵化から巣立ちまで約20日なので126回×20日=2,520回の給餌が必要である。我が家のシジュウカラもこのようなペースで給餌していたようである。孵化後5日も経つと雌も餌獲りに参加するのであるが、当初の雄の働きぶりは目を見張るものがあった。

北海道大学大学院で博士号を取得された乃美

大佑さんは非常に興味深い論文を発表し (Nomi D, Yuta T, Koizumi I (2018) . Male feeding contribution facilitates multiple brooding in a biparental songbird. Ibis 160:293-300.)、のちに自らウェブ上で解説している (バードリサーチニュース; <https://db3.bird-research.jp/news/201809-no2/>、以下同サイトから抜粋引用)。「多くの鳥は一羽の雄と雌がつがいになって子育てをします。この理由として一方だけで雛を育てると、繁殖がうまくいかなくなるといわれるためですが、意外にも雌一羽になってもほとんどの雛を巣立たせられる種も少なからず存在します。雌一羽でも育てられるなら、雄は子育てをするよりさっさと別の雌を探した方が自分の子どもを多く残せるはずですが、それならばなぜ雄は手伝う必要があるのでしょうか？」この問いに対し、乃美さんは、1回目の繁殖を行った55ペアのうち、23ペアが2回目の繁殖を行い、雄の給餌割合が高いペアほど雌が2回目の繁殖をした割合が高くなる傾向にあることを示し、「給餌貢献度の高い、要するにイクメンな雄とつがった雌ほど2回目の繁殖がしやすくなることが示唆されました」として「雄の子育てが雌の負担を軽減し、雌が次の繁殖をしやすくなることで、結果的に雄がより多くの子孫を残せる」という説 (West & Capellini 2016) を北海道で実証したのである。我が家の映像では、カメラで覗き見るのが憚られるくらいのラブラブ愛情劇に見えたが、もしかすると雄の自己保存本能・戦略にしたがった「仕事」だったのかもしれない。

乃美さんは「この「負担軽減説」はもっと注目されるべきです。というのも、この仮説はこれまで雌雄で子育てを行う哺乳類が進化した理由の一つとして支持されていましたが、鳥類ではほとんどの種が雌雄で子育てを行うにも関わらずこの仮説が検証されてこなかった」とまとめているが、自然界の奥深さを感じざるを得ない。

万物の霊長たる人類も、家庭に限らず職業の現場においても「負担軽減説」にもっともっと注目すべきかもしれない。

